

## すべての道は

川越市で地元の人から聞いた話である。

「あんたらこの道を『川越街道』と言ってるけど、ここは川越だよ。何とか街道と言うのは行き先の名前を付けて言うだろう。川越の人間が『川越街道』っていう筈がない。」

そうなのである。街道名は最終到達地点（最終目的地）+街道という構成で命名される。では川越で前述の人がその道を何と言うかということ『東京街道』である。

屁理屈で言うと、センターラインの下り側が『川越街道』であり、上り側は『東京街道』となるのか。

ひとつの道に二つの名前を付けることは混乱の元だし、だいたい日光・甲州・青梅・東海・奥羽・水戸・千葉などの各街道の東京起点と最終目的地以外の土地では、指差す方向によって呼び方を変えるかということそんなことはない。と言うわけで今、東京街道といわない。

「東京街道」は一般には死語になりつつあるが、一方で現代でもこの東京街道的命名の首都への道が残っている。

それは鎌倉街道である。多くの例を挙げられないが、鶴ヶ島市と日高市を結ぶ千人同心街道は日光の東照宮に参詣する大名が使ったことから今は「日光街道」と呼ばれているらしいが、その昔は鎌倉街道であったと聞いている。埼玉県滑川町の国営森林公園の中にはいく筋かの鎌倉街道と呼ばれる古道があるし、渋谷区のアサヒビルにある古墳の南側を通る細道も昔は鎌倉街道であった。それらの道が一筋であったかと言うとそうでもない。「いざ鎌倉」で関東のあちこちから鎌倉に向かう必要があったのだから、鎌倉を起点として放射状に伸びる鎌倉街道が複数あっておかしくない。すべての道は鎌倉に通ず、である。

『御伽草子』の中に『唐糸草子』がある。この中にも鎌倉街道らしきものが出てくる。

あらすじを言うと信濃の木曾義仲の家臣に手塚太郎がいた。その娘の唐糸の前は琵琶の名手で鎌倉に呼ばれていた。ある日木曾義仲討伐の情報を得た彼女はいち早く主君義仲にその旨を連絡し義仲から頼朝暗殺を命じられる。ところがこれが露見し処刑されかかるが松が岡殿（東慶寺）の取り計らいで一命を取り留めるも、石牢に押し込められる。唐糸の前には娘、萬壽がいてこの子が母と会いたいばかりに祖母に内緒で信濃から鎌倉へ乳母とともに向かい、頼朝に取り入ってついには母を助け出すとともに信濃に知行地をも得る。という孝行譚である。

家を出たものの方向がわからずもたもたしているうちに家人に発見され、改めて祖母を説得した上で祖母から鎌倉はここからは東にあるから太陽の出る方向に行けば鎌倉に出るなど無責

任な指示を受けて出発した。

この娘がたどった道筋が次のように書かれている。

萬壽の姫は、雨の宮を立ち出でて、通る所は何処何処ぞ。親子の契は、ふかしの里こそめでたけれ。浅間の嶽に立つ煙、身には余れる思いにや、いま入山を打過ぎて、上野国に隠れなき、常盤の宿をも打越えて、一の御宮を伏し拝み、二のたま原に出でしかば、親の名のみか、秩父山、末のまつ山を打過ぎて、霞の関をも分け越して、入間の郡、八瀬の里、いくらの里をか越しつらむ。曇らぬ影は星の谷の、とがみ河原をも打過ぎて、鎌倉山に著き給ふ。鶴が岡に参り、「南無や八幡大菩薩、萬の御神に越えさせ給ひ、親孝行の御神と承りて候へば、わが母の唐糸の露の命の内に廻り逢はせて賜ひ給へ…」

更埴市雨宮(起点) ふかし(=松本市深志) 入山(=群馬県松井田) 常盤(=群馬県) 一宮(=群馬県富岡市) たま原(=群馬県) 秩父山(埼玉県秩父市) まつ山(=埼玉県東松山) 霞の関(=埼玉県川越市霞ヶ関) 八瀬(=埼玉県川越市の場八瀬大橋)という経路でそのあとは省略で鎌倉、どうやら更埴市 松本市 碓氷峠 松井田 富岡 秩父 東松山 川越 日高 八王子 厚木 大船 鎌倉と歩いていった模様。関東平野の西の端を山裾をめぐりながら行ったような。最終的に鎌倉についたのだからこのルートも鎌倉街道であった証拠かも？

ところで、上記「霞の関」は埼玉県川越市霞ヶ関として残っている。草深い田舎の者が東京の永田町あたりの地名を真似してなどと悪口を言ってはならない。このお伽草紙は室町から江戸にかけて書かれた物である。太田道灌の頃の東京の霞ヶ関あたりは原野だったろうし、江戸時代は屋敷町だったろうし、関所があるはずがない。では東京が真似をしたのかということかもしれないが、東京都千代田区霞ヶ関はここに外務省が置かれたことから、霞の向こう、つまり海外との接触点としての意味で「霞ヶ関」と洒落たとか。

さて街道の「街」という字であるが、この文字を見るときまず目につくのが「彳」である。だから康熙字典で探すとき「彳」の部首でこの字を探したくなるが、それでは見つからない。康熙字典の144番目の「行」で探さなければならない。

「行」はこの形で一部首となっている。この「行」はある説では左足の表象の「彳」つまり

「彳」と右足の表象「ト」つまり「𠂔」があわさったものが「行」であるという。

もう一方の説は街路の形から導かれたものであり、この場合甲骨の「𠂔」がそのイメージ

をよくあらわしている。この左側を取ったものが「𠂔」つまり「行人偏」であるとする。

鶏と玉子のどちらが先か論争である。康熙字典でもこの順で解説しているから前者の方が確かなのかもしれない。

いずれの説に関係なく「行」の篆書の左側を取ったものが「𠂔」

で「エンニョウ(𠂔)」であり、長く行くという意味を持つ。

「街」の「行」の中に取り込まれている「圭」は玉の一種で、将棋の駒の裾が広がっていない形である。中世に関東地方で立てられた「板碑」(写真)をご存知の方はその形を想起していただければいい。「圭」はその玉の形を写したもので「土」が上下に並んでいるからといって土に関係する言葉ではない。



「圭」の表面には縦横の線で模様が描かれている。使用目的は天子が諸侯を各地に封ずる印として渡した。

「行」が街路であるとして、その街路が「圭」の表面のように縦横の幾何学的区分がされているのが「街」であるという。

この定義からすると、京都は室町時代に破壊されたが、平城京の面影を残しているから「街」と見られなくはない。しかし、都市計画がないまま野放図に広がった東京などは「街」ではない。

それはどうでもいい事にして、街と街とを結ぶ道を街道という。出発点が街でも終着点が海であれば街道じゃない。また街道と街道を結ぶのは「往還」「脇往還」で街道とは言わない。

ロマンチック街道などと使われると、「街道」とは人里離れた部分や夢を育むポイントがあるような気がして旅心を誘われる言葉である。でもいまの日本は街道両端の街がどんどん拡大して、あるいは衛星都市ができて、街同士がくっついてしまったものがある。そうになると街道も生活道路の一部だ。夢がなくなった。